

コアの世界

「神の中には、深々とした輝ける闇があるという人もある」

まさにそのとおりの場所だった。漆黒の闇でありながら、光が溢れていたのだ。

そこにいる間は、なおも質問と回答のやり取りが続いた。答えは言語と呼ばれている方法では返されなかったが、存在の「声」は温かく——奇妙に聞こえるかもしれないが——親身だった。存在には人間への理解があり、人間と同じ性質も持ち合わせていたが、その度合いが桁違いに広く深かった。私のことも知り尽くしていた。私が人間特有の一面と考えてきたものの温かさ、哀れみ、哀愁、さらには皮肉やユーモアといったもののすべてを溢れんばかりに備えていた。

オームはオーブを通して、私に語りかけた。宇宙はひとつではない。お前の理解を超えるほど数多い宇宙がある。しかしすべての宇宙がその中心に愛を持っている。どの宇宙にも邪悪は存在しているが、ごくわずかでしかない。邪悪が存在しなければ、自由意思を持つことができない。邪悪はそのためこそ必要とされてきた。自由意思を持つことなしには、発展が得られない。進歩がなくなり、神が人類に対して願っていたことを、人類には達成することができなくなる。世俗世界の邪悪は醜悪で強力でもあ

るが、全体から見れば愛が圧倒的に優勢であり、最終的に勝利を収めるのは愛である。声はそう語った。

私はその場所で、無数の宇宙に豊かな生命が息づいているのを見た。その中には人類よりはるかに進歩した知性を備えるものたちもいた。数限りない高次の次元があることも知った。高次の次元は、その中へ入り、直接体験するかたちでしか知る方法がないこともわかった。低次の次元空間からは、高次元世界は知ることでも理解することもできないのだ。因果の関係は高次元にも存在しているが、この世界のご概念とは異なっている。またこちらの世界で体験されている時間空間は、いくつもの高次元に複雑なかたちで密接に織り込まれている。言い換えれば、高次元の世界はこの世界と完全に隔絶しているわけではない。あらゆる世界がそれらすべてを包み込む神聖な“真理”の一部分を構成しているのである。そして高次の世界からは、こちらの世界の時間や場所に自由につながるができるのだ。

そこで学んだことがらを解き明かす作業は、この先の一生に加えてさらに時間をかけなくてはならない大仕事になるだろう。私に与えられた知識は、数学や歴史の原理や定理を“学習”する性質のものではなかったからだ。誘導されて学び取るという手順を踏まえずに、そこではじかに洞察を得ることができた。記憶する手順を介さずに、瞬時に永久に消えない知識を授かった。得られた知識は通常のように色褪せることもなかった。私はいまに至るまで、そのすべてを保持し続けている。学業を通じて身につけて

きた長年の知識より、それははるかに明瞭な知識でもある。

忘却の恩恵

あちら側で見た地球は、無限の暗闇に浮かぶ薄青色の点だった。地球とは善と悪とが混在している場所であることがわかり、それが地球の独自性を際立たせる一因になっていた。地球においてさえ、悪より善の方がはるかに優位を占めていたが、地球では高次の次元では考えられないかたちで、悪が影響力を行使することが許されていた。ときには悪が優勢になるのを創造主が容認しているのは、われわれ人類という存在に自由意思の恩恵を授けるためにそうする必要があったからなのだ。

宇宙全体にも悪の微細な粒子は漂っていたが、宇宙に満ち満ちている善性、豊かさ、希望、無私の愛に比べれば、悪の総量は砂粒ひとつほどのものでしかなかった。異なる次元は愛と受容そのもので構成され、これらの性質を欠いているものはただちに場違いであることがわかった。

しかしながら自由意思というものは、愛と受容から離れる代償を払うかたちでしか得られない。人間は自由な存在でありながら、自由などないと錯覚させる環境にがんじがらめに取り囲まれているのである。それでも地上世界での人類の営みにとって、自由意思には重大な役割がある。いずれ人類が時間を超越した別次元へと入っていくことを可能にする、考えられているよりはるかに深い役割を担っているのだ。いつかは全員がそのことを周知する日

がやってくることだろう。世俗世界に生きるのは、取るに足りないことのように思えるかもしれない。可視、不可視の無数の宇宙にひしめく世界や生命の中では、人間などちっぽけな存在でしかないように見える。しかし人間はきわめて重要な存在なのだ。人間はこの世界で神なる存在に向かって成長する役割を担い、その歩みは高次の存在たち——魂や輝く光体——によってつねに見守られ続けているのである（これはゲートウェイの世界で頭上の空高くに見えた存在を指すが、これらがわれわれの文化で天使と呼ばれる概念の起源ではないかと思う）。

現実的な選択は、進化的発達の所産である死を免れない肉体と脳を持つ、霊的な存在であるわれわれ、また地球の産物であり、地球の急務を担う存在であるわれわれ人類に託されている。ほんとうの思索を受け持つのは、脳ではないのだ。ところが、ある部分では脳それ自体のせいで、われわれは自分自身やその考えを脳に関連づけてとらえるやり方に慣らされてしまい、脳や肉体を大きく超える存在である本来の自分に気づく力を失っているのである。

ブルーフ・オブ・ヘヴン 早川書房 Eben Alexander